

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

気まずさ 特效薬は「ありがとう」

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



ある日、「悠悠と。」の読者の男性が編集部に来られました。結構なご年配です。「表彰された自慢」に始まり、「家族」や「社会」への不満」と話は続き、最後は気に食わない人たちの悪口に発展しました。約1時間後、言いたいことを吐き出したせいか気持ちよく席を立ちました。その時に事件は起きました。



私は郵便配達や宅配なども含め、編集部に来られるどんな方にもお見送りの時、必ず「お気をつけて！」と声をかけるようにしています。編集部の建物は年代モノの3階建てビルの最上階で、エレベーターはなく階段も急です。そこでこうした声掛けが当たり前になっています。この時もいつものように「お気をつけて！」と声をかけました。

その途端、彼は立ち止まって振り返り、キッと私をにらんで「そんなに俺はタメに見えるか？」と言いました。「足元がおぼつかなく見えませんか？ よほよほしていると笑っているんだろう」と畳み掛けます。彼は「自分はまだまだ元気だ、大丈夫」と思い込んでいたのでしょう。その自信が「お気をつけて！」の一言に飛ばされてしまったよう

に思えたのかもしれませんが。もちろん「いやいや、タメには見えません。どなたにもこう声をかけるのですよ」と続けましたが、機嫌は直らず、不機嫌な様子で帰っていかれました。



最近、地下鉄などで優先席（札幌では専用席）を譲った若者、譲られた高齢者のそれぞれの立場での言い分が話題になっているようです。譲られる方は「まだまだ若い」と思っているし、譲る方は意を決して声をかけます。せつかくの好意にもかかわらず、気まずい空気に包まれるのはいいのでしょうか。どうしたらいいのでしょうか。

その特效薬は「ありがとう」という言葉じゃないでしょうか。さらに「いかにいかに、年寄りのくさく見えたくない。もうちょっと頑張れるので、今日は結構ですよ」「ぐらい付け加えれば、笑いがとれるような気がします。

誰もが年を取り、いろいろなところにガタが来ます。気力や根気が減ったかもしれませんが。会社という船を降りた「おっちゃん」はいかにもよりどころがなく、強がっていても弱いのです。でも負けてられません。

そんなおっちゃんの生の声をお聞きください。



まなべ・やすとし 1950年生まれ、大阪市出身。ワインメーカーや自動車製造会社などを経て、99年に高齢者向けの生活情報誌「悠悠と。」を創刊し、編集長を務める。同誌は昨年10月、100号に達した。